

中学一年の十二月、ぼくはそれまで拾ったことのない小型のタカラガイを沖の島で見つけた。

このタカラガイは、茶色と白の帯が殻に交互に走っていた。そしてその白い帯には、茶色の「く」の字模様が並んでいるという、特徴的なものだった。

ぼくの愛用していた『原色日本貝類図鑑』をさつそく引いてみる。

それによるとこの貝の名前はアジロダカラ。そしてびっくりしたことに、この貝の分布(生息場所)は、『奄美大島以南』と書かれていた。

ぼくは何度も目の前の貝と図鑑を見くらべた。

やはり何度見てもアジロダカラだった。

大人向けのこんなりっぱな図鑑が、まちがっていることってあるんだろうか。ぼくは悩んだ。

そして、イガワ君の家へ遊びに行つたときに、さりげなくこの話をきり出してみた。イガワ君はおどろくだろうか。それとも……

「ぼくもとつた」とあるよ」

びっくりしたことに、イガワ君はごくあつさりそういつてのけたのだ。何だか安心もしたのだけれど、自分一人が大発見をしたかもしれない、という思いはしぼんでしまった。

それにしても、「奄美大島以南」と図鑑にのっている貝が、じつさいには館山にすんでいるなんて、とちよつとおかしくも思った。

このアジロダカラの一件は、図鑑に書かれていることがすべてではないということを、ぼくに教えてくれたのだった。そういう意味では、アジロダカラを見つけたことは、ぼくにとつて、やはりひとつの「大発見」だった。

じつはこのとき、ぼくにはイガワ君にきこうと思つてのどまで出かけたけれど、飲みこんでしまった質問がもうひとつあった。

貝拾いをはじめた小学三年生のころ、ぼくはやはりアジロダカラのように図鑑にかかれた分布とかけはなれた貝を拾っていたのだ。

拾った場所は大賀の浜。最初拾ったときは何という貝かはわからなか

った。というのも、もうボロボロにこわれた貝だったからだ。

殻の口のあたりは失くなつてしまい、殻の先端と中心がそろって残っていた。色もほとんどすれ、わずかにうす茶色の色合いが、もとの模様をうかがわせるにすぎなかった。

それでも、ぼくがこの貝を拾ったのは、何となく「あやしい」というカンがはたらいたからだ。

この貝殻は気になつて、何度かとり出してはながめた。そして『原色日本貝類図鑑』を見ていくうちに、どうやらこの貝はシヨッコウラという貝のこわれたものじゃないかと思うようになった。ただ、そう判断するにはあまりに貝がこわれていて、その判断に自信がなかった。シヨッコウラの分布は図鑑によると、紀伊半島以南と書いてあり、そのことがますます自分の判断をぐらつかせた。

イガワ君とアジロダカラの話をしたとき、図鑑に奄美大島以南と書いてある貝がじつさいに館山でも拾えたのだから、シヨッコウラがいてもおかしくはないかな、とは思つた。それでも自分の持つてゐる貝があまりにみすばらしいものだったから、イガワ君にこの話をするのをやめてしまったのだ。それにどこか納得しきつていない自分もあった。なんで図鑑にははるか南にしかないと書いてある貝が、館山で拾えたりするんだろう、と。

でもその答えを見つけれられたのは、もつともつと先になつてのことだった。

(盛口満『ぼくは貝の夢をみる―ゲッチョ先生の博物館 貝殻編』)

(アリス館より)

文章中に、図鑑に書かれていることがすべてではないということばがあります、このことについてあなたが考えることを、図鑑などを使つてものを調べた経験にふれながら、書きなさい。